



インディアナ日本語学校便り

学校教育目標 自ら学び、正しく行動する国際性豊かな児童生徒の育成

大変だけど・・・友達と勉強できてうれしい!!



2 年 1 組

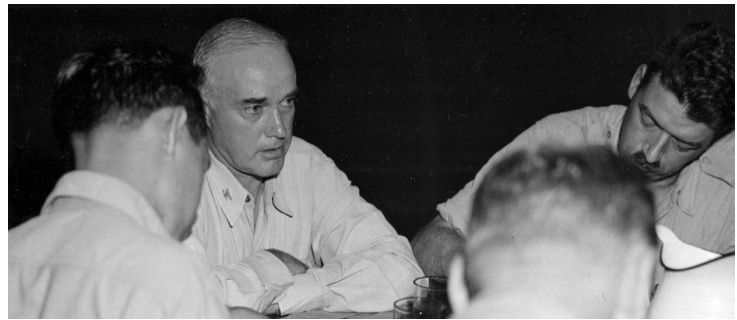


2 年 2 組

日本の運命にかかわった原子爆弾(原爆)を運んだ『戦艦インディアナポリス』 2



インディアナポリス号



沈没について、グラムで記者たちに語るチャールズ・マクベイ艦長

1945 年 11 月、インディアナポリス号のかつての艦長マックベイ大佐は、軍法会議にかけられ、ジグザグ運動をおこたり、船を危険にさらしたという罪で軍法会議にかけられました。

魚雷を発射した張本人、橋本以行(はしもと もちつら)も軍法会議に呼ばれました。橋本以行は、「フィリピン海で自分がディアナポリスを発見したのは偶然であり、その時点ではインディアナポリスがジグザグ航行していようがいまいが、魚雷を確実に命中できる状況だった。」と攻撃時の証言をしました。しかし、証言はカットされてしまい、マックベイ艦長の有罪が決定しました。アメリカは第二次世界大戦の戦場で約 700 隻の艦艇を失いましたが、戦場で撃沈された艦艇の艦長が軍法会議にかけられたのは、マックベイ艦長ただ一人でした。判決は有罪になったことでマックベイ艦長の海軍での昇進は終わりました。



軍法会議で証言した橋本以行 しかしそれだけでは収まらないのが、亡くなった乗組員の遺族でした。戦場で戦死したのならまだしも、サメに食われたのではうかばれない、という理由でした。マックベイ艦長は、退役後も死んだ乗員の親族から長年にわたり非難の手紙が届き、遺族たちに責め立てられ続けたマックベイは、1968 年自宅でピストル自殺してしまいました。自分の責任と汚名に苦しみぬき、結局その苦しみから逃れられずに、23 年後の 1968 年にピストル自殺をして、70 年の生涯が終わりました。

実は、海軍の上層部ではフィリピン海で当時、日本の潜水艦が活発な活動をしていることを把握しており、そうした情報をマックベイ艦長にちゃんと伝えておらず、護衛艦をつけなかったという怠慢があったというのが

真相だったのです。

生きのびたインディアナポリス号の人たちは、二年ごとに「生存者の会」を行い、かつて漂流中の自分たちを発見してくれたパイロットが顔を見せると、たちまちまわりを囲みました。そして、生きてきて帰れた喜びを全員で祝福し、最後には全員が手を取り合って感動して涙を流したのです。

ある生存者は、自分たちの頭上を飛ぶ飛行機の姿が、まるで天使が舞っているように見えた、その時の気持ちを話しています。事実、そのパイロットはこれ以上留まると燃料が無くなって墜落するかもしれないという危険をおして、最後の一秒まで漂流者たちの頭上を飛行し懸命に励みのエールを送り続けたのです。

艦長の名誉回復

1975 年、スティーブン・スピルバーグ監督による映画「JAWS/ジョーズ」が大ヒットしました。人食いザメの恐怖を描いた映画ですが、映画の中で老人が、「昔、おれはインディアナポリスの乗組員で、原爆を運んだんだ。」と語るシーンがあります。

ハンター・アラン・スコットは、1998 年、小学 6 年生で 12 歳の少年であった時に、この映画を観ました。その後、父と話をしてインディアナポリス沈没に興味を持ち、スコット少年は、夏休みの宿題の「歴史発掘コンテスト」に応募するため、図書館でインディアナポリスのことを調べる研究を始めました。しかし、資料がほとんど見つかりませんでした。そこでスコット少年は、沈没から生きて戻った 150 人近くに直接会って話を聞いたり、手紙を出したりして、文書もくわしく調べました。



映画「ジョーズ」

この過程で、アメリカ軍がインディアナポリスからの救助信号を日本軍の策略と考えただけではなく、通信係から報告された上官が、勤務中にもかかわらず酔っぱらっていてまともな対応をしなかったとか、現場に向かった救助船を「おれの命令なしで動かすな」と、帰させた上官がいたとか。また、インディアナポリスはやや旧式の軍艦で、潜水艦の探知機はなかったため、駆逐艦の護衛が必要だったのに、なぜかこの要請は、司令部からは却下されてしまったこと。そして内部の数々のミスを経て、責任逃れをするために、全責任をマックベイ一人に押しつけたことがわかったのです。スコット少年は、軍法会議は誤審であり、マックベイは無実なのではないかと考えるようになりました。

スコット少年の研究は、下院議員の支援を受け、インディアナポリスの生存者らと共に、マックベイ艦長の名誉回復運動に広まりました。スコット少年は、マックベイ艦長は無罪とされるべきであると米国議会で主張しました。

スコット少年とインディアナポリス生存者らの証言は、2000 年 10 月にビル・クリントン大統領による署名・議会の承認により、マックベイの無罪をもたらしました。12 歳の少年の自由研究の「調査」が、なんと最終的には大統領をも動かしたのです。アメリカならではの話です。

生存者の集まり

戦後、マックベイ艦長が亡くなった後も、インディアナポリスの沈没を生き延びた人たちは定期的な集まりを続けました。なんと、生存者たちは 1990 年 12 月 7 日に、ハワイのホノルルの真珠湾に集り、橋本を招いて、戦中は互いに国のために戦ったことをたたえあったといいます。

そして、1990 年代後半に、アメリカ国内でインディアナポリスの艦長の名誉回復を求める声が高まった時、

アメリカ議会が意見を聞く会を開き、インディアナポリスの生存者らがマックベイ艦長の無実を訴えました。マックベイ艦長の名誉回復に向け動かない議員の重い腰を上げさせたのがなんと、橋本が1999年11月にアメリカの大物議員に送った手紙でした。橋本はマックベイを擁護し熱心に支援していたのです。

2000年マックベイ艦長の無罪により、名誉は回復されましたが、橋本はその5日前に亡くなっており、その知らせを聞くことはできませんでした。

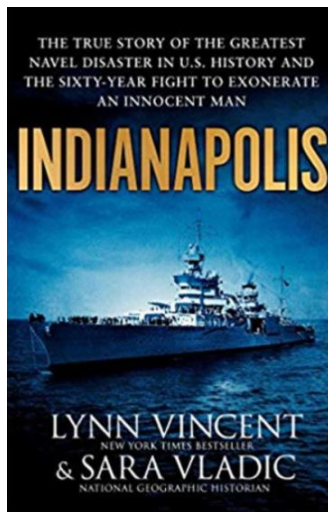
そして、2005年7月、インディアナポリス号の生存者の集まりが、インディアナ州インディアナポリスのホテルで開催されました。式場には生存者の子どもや孫が500人も参加し、そこに、橋本以行の孫娘とその子ども2人も参加していました。インディアナポリス号の生存者の一人が、一緒に「ゴッド・ブレス・アメリカ」を歌おうと呼びかけました。前部に集まり、橋本の家族と500人のインディアナポリスの家族が、微笑と涙を浮かべながら一緒に、ひとつにまとまって歌ったのでした。

インディアナポリス・ナショナル・メモリアル



記念碑 インディアナポリス市内

マックベイ艦長の名誉回復に先立って、1995年8月2日にはインディアナポリス市内にインディアナポリス・ナショナル・メモリアル(Indianapolis National Memorial)が建てられました(市内運河(カナル)のほとりにあります)。メモリアルは、沈没で命を落した乗組員の名前が全て刻み込まれています。また、インディアナポリスに関する資料はインディアナ州博物館に納められました。2016年、インディアナポリス号の事件を描いた映画『パシフィック・ウォー』が、ニコラス・ケイジ主演で制作されました。



『Indianapolis』(Lynn Vincent, Sara Vladic, Simon & Schuster)



↑インディアナポリス号のアメリカ映画化

↑アメリカで出版された本「Indianapolis」(筆者 Lynn Vincent, Sara Vladic 出版社 Simon & Schuster)

【参考】原爆を運んだ米軍艦を沈めた帝国海軍のある軍人「日本人が忘れた戦後秘話」森川聡一

戦争中、原爆に関係したインディアナポリス号の沈没と、それにともない海に沈んだ犠牲者や生死の間をさまよった乗組員の悲惨なお話でした。話はこれで終わりではなく、さらに生き残ったアメリカ人と日本人橋本艦長との間の交流がその後も続いたことでした。そして、なんと橋本艦長が亡くなった後も、その孫、ひ孫までもつながつている事実でした。

8月15日日本の終戦記念日。インディアナポリス号が運んだ原子爆弾は、その後広島(8月6日)・長崎(8月9日)に落とされました。原爆の爆発の瞬間、落下中心地では約3000℃から4000℃の高温となりました。太陽の表面温度が約6000℃、鉄が溶ける温度が約1500℃であることを考えると、異常なほど高温の熱線が放出されました。爆発の秒速440mの熱風と放射能のため、50万人(原爆による死者数、2019年8月時点、広島31万9186名、長崎18万2601人、計50万1787人。)の死者が出ました。

アメリカ人の立場からすれば、日本の本土への上陸作戦を行っていたら、硫黄島の戦い、沖縄戦のように日米ともにより多くの人命が失われたはずであり、戦争を終わらせるためには、「原爆はやむをえなかった」という考え方になるかもしれません。

国と国の戦争は、お互いを敵とみなし、死者を増やすばかりです。しかし、そこに住む人々は最初から憎しみ合っているのではなく、平和な生活を望む普通の人々なのです。

みなさんは、アメリカと日本の戦争で、どんなことが起きたのかをこれから勉強して知っておくことが大切です。そして、第2次世界大戦で戦争がもたらした悲惨さを学び、それを未来に生かしていかなければなりません。みなさんは、現在ロシアの一方的なウクライナ侵略の戦争から、現実起こっている映像を見えています。罪のない一般の人々が大量死んでいくニュースを見た時、何を感じ、何を考えるかが大切です。世界平和を築いていくためには、お互いをよく理解すること、そして協力し合うことが何よりも大切です。

生徒の読書感想文 高等部

夏休みの読書感想文

『待ち伏せ』を読んで。

高等部一年生 井村 亮介

九歳の娘が私に尋ねた。

『お父さんは人を殺したことがあるのかと。』

ないと答えた。けれど本当はあった。まだ、

戦争が行われていた頃、私は彼が怖かった。

ある道を個体で待ち伏せをしていた。私は

まだぼおとしていた。すると、片手に武器

を持つている彼が私の前を横切った。私は

恐怖で隣にあった、手榴弾のピンを抜いて投げた。

そして彼は、上の方に向かって体を捻って地面に

落ちた。後でカイオウが私に言った。

『あれは正当な殺しなんだ、あの男は兵隊だったし、

これは戦争だ。お前もつとしゃんとしなくちゃ

いけない。いつまでも死体なんか眺めてないで、

自分にこう尋ねるのだ、もし立場が逆だったらこの

死んだ男はどう行動しただろう』

と言った。戦争している以上、罪の無い人とたちや、

敵兵を殺さなければならぬ。これが戦争の恐ろしさだ。

この事をチムオブライエンは伝えたかったと思う。

だからチムオブライエンは戦争の話ばかりを書いていたと、

思う。

そして戦争はしてはいけない。

夏休みの読書感想文

『待ち伏せ』を読んで。

高等部一年生 河野 龍畝

ティム・オブライエンの「待ち伏せ」を読んで、僕はすごく複雑な気持ちを持ちました。

まだ九歳の娘、キャスリーンにベトナム戦争で人を殺したことがあることを伝えられなかったオブライエンは、キャスリーンにいつか話すつもりで「待ち伏せ」をととても叙述的に書いてることが読んで分かりました。

話の中では、チームメイトのカイオワと待ち伏せ地点で二時間ごとの交代で待ち伏せしている間に、霧の中から出てきた男を手榴弾で殺す場面が一番印象的でした。なぜなら手榴弾を投げる前から、敵の軍人が死ぬまでのオブライエンの一文一文に後悔しか無かったからです。

最後にオブライエンが男を殺したことが正しい判断だったかどうかを「今でもまだ、私はそれを整理し終えてはいない。」と書きますが、それ以前に人を殺すという判断をしたことを後悔をしていることが重要だと思います。人を殺す後悔を想像して戦場に向かう人はいないからです。

戦争中に軍隊でオブライエンのように人を殺す判断を託された気持ちになる人がほとんどですが、軍人はもうすでにその決断をさせているものであり、変えられないことです。とすると、戦争後の軍人の心の傷は、はかり知れません。

戦争は、だれか一人が始めるものではなく、終わるものでもないのです。

夏休みの読書感想文

『待ち伏せ』を読んで。

高等部一年生 田上 陽翔

この話の初めには「私」の娘からの質問から始まる。娘は「お父さんはなぜ戦争について語るのか」という質問をしていたが、「私」はそれは当時あったことをまだ受け止め切れていないからだと考えてる。

当時あったこととは、「私」が人を殺したことである。

ベトナム戦争との戦争で「私」が小隊として待ち伏せをしていた時のこと。それは夜だったため「私」と二人一組を組んでいたカイオワと二時間おきに交代で見張りをしていた。もう二人とも疲れ切っていた時だ。「私」がふと顔を上げた時、一人のベトナム兵が茂みから現れた。「私」は彼の存在に恐怖感を覚えた。条件反射的に準備してあった手りゅう弾を手に取りピンを抜いた。そして脳で判断するよりも先に体が動いてその手榴弾を投げた。

しかし、彼は銃を落として駆け出しそうになったが、手榴弾を見つめていた。そもそも敵の兵が道の真ん中で銃一つを持って歩いているのはおかしい。彼は戦争の経験が浅かったと考える。「私」は彼に対する恐怖感から解かれるために彼を追いやろうとしただけで殺意などなかったため、彼に警告を与えたかったが、手榴弾の爆発音とともに彼は死んでしまった。

「私」はその死体をほんやり見つめていたが、カイオワに「仕方ない」と説得された。でも納得はいかなかった。

「私」は今でもそのことに関して整理できていない。だからこそ今も戦争について語っているのだ。「私」はたまに彼が幻覚として現れるそうだ。彼は「私」に対して微笑むから、あの時の殺しは正当だったと伝えたいのか、少なくとも彼は「私」の中に生きているのだと考える。

夏休みの読書感想文

『空き缶』

高等部二年生 中野 元太

この話は長崎県で被爆した同じ女学校の生徒6人が卒業してから30年後の学校に戻ってくるという作品です。この作者の林京子は昭和20年（1945年）8月9日、長崎で被爆を体験した人です。その体験談を小説にしたのがこの『空き缶』です。ここで私が思ったのがなぜ被爆の体験談と空き缶が関係あるのかということです。

きぬ子以外の5人は廃校になった母校を訪問しに来ました。そこにはもちろん誰もいなく当時のことを振り返りながら中庭に立っています。私もこのシーンには共感しました。学校の中庭に立つとその時の思い出が昨日のことのように蘇ってくるという体験をしたことがあります。その後、彼女らは校舎の中の講堂を見に行こうと言います。そしてその講堂では沢山の生徒が死んでいき追悼会が行われた場所でした。私はこの文章を読んでとても胸が痛くなりました。友達が死にゆく姿を見ることが上に辛いことではないなと思いました。西田は「原爆の話になると弱い」と言ったときに私も同じだなと思いました。

私も戦争の話は極力聞きたくないし考えたくもありません。自分が死ぬかもしれないと考えることは誰しもが恐怖だと思います。きぬ子が持っていた空き缶の中には、きぬ子の両親の骨が入っていました。その空き缶を教壇の上において、黙祷をしようと言った先生はとても素晴らしい人だなと思いました。

この本を読んだ私の感想は、とても悲しい話だけど絶望した人を勇気づける事ができる素晴らしい作品だなと思いました。

夏休みの読書感想文

『空き缶』

高等部二年生 グリグーティス 晶子

この物語は作者である「私」と4人の同級生が長崎の母校を廃校前に訪ねるところから始まる。同級生の一人が先生のものまねをし、その先生のあだ名など30年も前の当時のことや感情を思い出す。まるで女学生に戻ってしまったようだ。長崎が舞台だとはわかってはいたのだが、校舎のガラスの話になるまで、原爆とあまり結びつけずに読み進めていた。

昭和20年の8月9日に長崎に原爆が落とされ、彼女たちの日常は奪われてしまった。多くの同級生や先生を亡くし、彼女たちも被爆した。原爆投下から30年経っても体の中のガラス片を取り除く手術をしたり、自分たちの健康（原爆症）のことを気にかけたりと、彼女たちが私の想像以上の苦しみを抱えて生きてきたのが伺える。

この小説のタイトルになっている「空缶」の話は最後の方になってやと出てくるが、「そういうことだったのか……」と私はショックを受けた。この時に来られなかったもう一人の同級生、きぬ子が空缶を毎日学校に持って来ていた。原爆によつて亡くなった両親の遺骨を大切に空缶に入れ、毎日一緒に登校していたのだ。「私」はきぬ子がクラスメートだったことを覚えていなかったが、空缶と少女のことはよく覚えていた。今の私と同じぐらいの年齢だったきぬ子はどんな気持ちで両親の骨を拾い、空缶に詰めたのかと思うと、悲しい気持ちになる。

今年で日本が終戦を迎えて77年になる。日本は77年間、唯一の被爆国として平和の大切さや核兵器の怖さなどを発信してきたと思うが、世界では今でも戦争が無くなっていない。核兵器がなくなること、そして理不尽な戦争が世界からなくなることから願っている。

【お知らせ】時間割の変更

時間割が、8月27日より前と同じ以下の時間に戻ります。学校要覧の通りとなります。中学部・高等部は変わりません。

○図書係より……来週8月27日より、試験的に図書の貸し出し、返却を同日に行う試みをおこないます。

本日の配布物
運動会プログラム
(保護者用
家庭数)

時間割

	低学年(幼～小4)	高学年(小5年～中3年)		高 等 部	
職員朝会	8：50～ 8：55				
朝 の 会	8：55～ 9：05				
第1校時	9：05～ 9：50			第1校時	9：05～10：05
第2校時	9：55～10：40			第2校時	10：15～11：15
20分休憩	10：40～11：00			第3校時	11：25～12：25
第3校時	11：00～11：45				
昼食休憩	11：45～12：15	第4校時	11：55～12：40	昼食休憩	12：25～12：55
第4校時	12：15～13：00	昼食休憩	12：40～13：10	第4校時	12：55～13：55
第5校時	13：10～13：55				
帰りの会	13：55～14：00			13：55～14：00	
下 校	14：00				